楽しく学ぶ音楽の基礎・基本

～音楽づくりの中に記譜を取り入れて～

田辺　麻衣子

「記譜の学習」として決まった時間を授業の中に位置づけるのではなく，特に音楽づくり（創作）領域を中心として，題材の中に楽譜を理解したり，音符を書いたりする活動を自然に組み込んだ。音楽作りという探求的な学びを行う中で，「何拍子かがわかる。」「小節の中にどれだけ音符が入るかがわかる。」「四分音符・二連八分音符・四分休符・二分音符がわかる。」といったような知識を，子どもたちは負担に感じることなく得ることができた。また，獲得した知識を活用して音楽作りに活かす姿も見られた。しかし，子どもたちが考えたリズムには複雑なものも多く，それを表現する技能が追いつかないという課題が残った。

キーワード：基礎・基本，記譜，音楽づくり，ペア学習

1．「音楽の基礎・基本」とは

簡単に「基礎・基本」という言葉を使ってしまうが，音楽における一番の「基礎」は「拍の流れを感じてその流れにのること」であると考える。基礎を築いた上で「基本」にあたる部分を身に付けていく。

１年生で言えば，下記の通りである。

・簡単なリズムフレーズを表現すること
・範唱や伴奏に注意して歌うこと
・身近な打楽器の奏法を知ること
・鍵盤ハーモニカで演奏すること
・美しい音色や音色の違いに気を付けて聴くこと

これは，学習指導要領で示されている「２　内容」に当たる部分である。様々な音楽活動を行うことで子どもたちにはある程度「基礎・基本」が身に付いていく。

しかし，この曲は上手に歌えるのにあの曲になると歌えない，あのリズムフレーズと同じなのにこの曲になると演奏できないということもしばしばおこる。また，高学年や中学生になっても，繰り返し戻って同じ学習をしている，楽譜が読めないという話をよく聞く。これは，身に付けたい基礎・基本の内容を子どもたちと一緒におさえたりまとめたりする機会が少ないために，せっかく体を動かして養った音楽的感覚と表現の基礎技能を子どもたちがうまく活用できないままになっているからではないかと考えた。つまり，記譜ができないということが原因の１つではないか。子どもたちが身に付けた感覚や技能を音符の理解や楽譜の決まりと結びつけることで，もっと「基礎・基本」が正確に定着していくのではないかと考えた。そこで，音楽づくりの題材の中に記譜の学習を組み込んで子どもたちに楽譜に対する理解を深めていこうとしたのである。

また，「楽しく学ぶ」と本校学校提案「学びの質の高まりをめざして」に関わって低学年ではペア学習が有効であると考えた。一人で課題に取り組むことが難しい子どももペアの子どもと交互にしたり，話し合いながらしたりすることで楽しく学ぶことができると考えたからである。さらに，話し合いの中から新たな気づきが生まれたり，工夫しようとしたりすることでお互いがもっている良さを生かして高め合う活動を行うことができるのではないかと考えた。

2．「基礎・基本」を身に付けるために

「基礎・基本」を身に付けるために，１年間を通して音楽づくり領域を中心に実践を進めた。

①記譜の活動を取り入れることで子どもたちに「基礎・基本」が身に付いているか実践する。
②どの場面で記譜の活動を取り入れることが効果的であるのかを実践する。
③ペア学習を行うことでどのような学びの質の高まりが見られるのかを検証する。

3．授業の実際

ここでは，二つの題材について報告する。

3．1．「リズムにのってあそぼう」より

この題材では，『ぶんぶんぶん』と『てをたたきましょう』の２曲でリズム遊びを行った後，「ことばあそび」で記譜の学習を取り入れた。なぜなら，先の２曲で「たん・たん・たん・うん」や「たん・たた・たん・うん」などのリズムフレーズを正確に表現できるようになっていたので，この「ことばあそび」で「たん」や「たた」を使ったリズムフレーズ作り活動をすることが望ましいと考えたからである。

具体的には，２小節の中に言葉を当てはめてリズムフレーズを作る活動をペアで行った。「たん」「たた」という言葉で書くのではなく，音符を使って書くようにした。音符自体は丸と棒を組み合わせた簡単な記号のようなものなので，それほど子どもたちにとって抵

抗がないと考えたからである。さらに，中学年になってもう一度「たん」が四分音符だと覚え直すよりも子どもたちにとって混乱が少ないはずである。また，実際のリズムフレーズ作りでは，子どもたちが楽しく活動できるようしりとりを取り入れた。(図1)

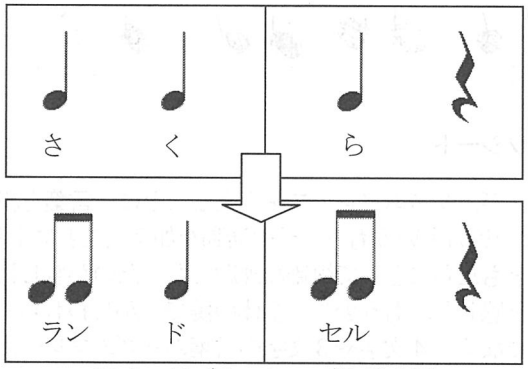

図1．リズムフレーズ作りの例

教科書では，「めがね・たまご・ねずみ」といった「たん・たん・たん・うん」のリズムフレーズと「かぶとむし・こいのぼり・かきごおり」といった「たた・たた・たん・うん」のリズムフレーズを交互に言ったり，リズムに合う言葉を見つけたりする活動を行うことになっている。しかし，その活動に自分で作ったリズムを読んだり書いたり正しく表現したりすることを付け加えることにより，身に付けたい基本が定着するのではないかと考えた。(図2)

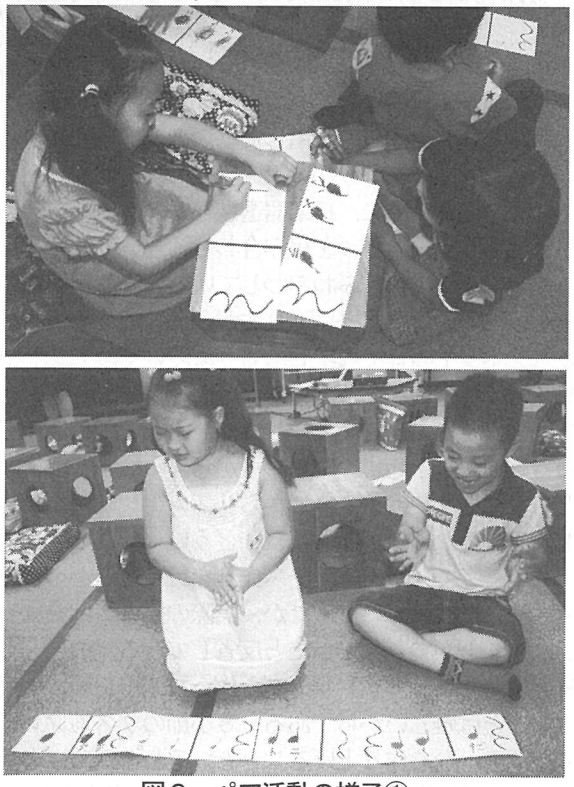

図2．ペア活動の様子①

また，使うことができる音符を四分音符・二連八分音符・四分休符のどれかとし，2小節の中で自由にリズムフレーズ作りを行った。そのため，「とり」という言葉を使うペアが複数いても，できあがったリズムフレーズは様々であった。(図3)

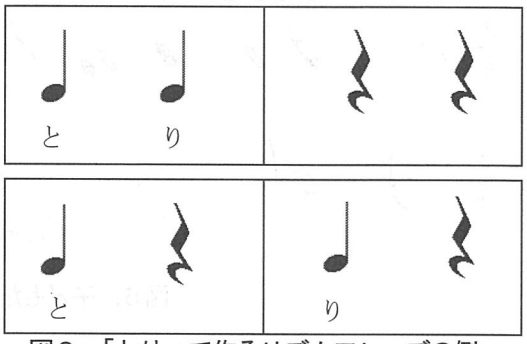

図3．「とり」で作るリズムフレーズの例

3．2．「ようすをおもいうかべよう」より

この題材では，『はる　なつ　あき　ふゆ』を中心に取り組んだ。まず，それぞれの季節にあった歌い方を工夫した。歌詞の様子を捉えて，春はわたげがとぶように優しく歌う，夏は大きなくじらが広い海で泳いでいるように元気よく歌う，秋はもうすぐ冬で急いでいるから少し早く歌う，冬は夜空のことが出てくるから眠たくなるみたいにだんだん小さくなるように歌うというように子どもたちは各季節にあう工夫を考えることができた。また，『きらきらぼし』では，すず・トライアングルの奏法を学習した。この後，もっと様子を思い浮かべるために，『はる　なつ　あき　ふゆ』を今まで学習してきた打楽器を使って飾る活動を加えた。もっとその季節らしくなるように，

①打楽器を選んで
②リズムフレーズを作って
③演奏の仕方を工夫して

記譜の学習を取り入れたペア学習を行った。(図4)

ここでは，演奏で使う打楽器をカスタネット・タンブリン・すず・トライアングル・大だいことした。また，使う音符を今までの四分音符・二連八分音符・四分休符に付け足して，二分音符も可能とした。特にトライアングルは演奏の仕方によっては違うかもしれないが，のばす方がきれいにきこえる楽器だからである。使うことができる音符が増えることで作ることができるリズムフレーズも格段に増えた。作ったリズムフレーズを書くことで，使っている音符の長さに気を付け合っているかどうか確かめることができた。(図5)

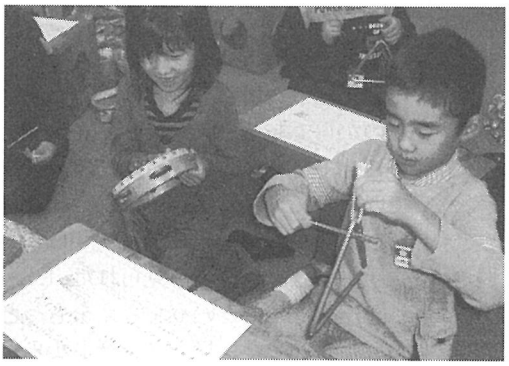

図4．　ペア活動の様子②

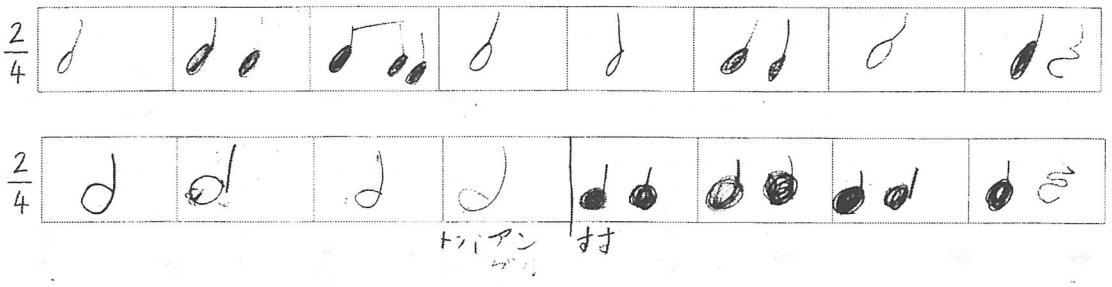

図5．子どもたちのワークシート

できあがったリズムフレーズを見ると，春のリズムフレーズつくりでは，トライアングルやすずを使っているペアが多く，秋になるとカスタネットやタンブリンを使い細かいリズムフレーズを作っているペアが多かった。これは，歌詞の様子を思い浮かべ，リズムフレーズ作りを行った結果であると考える。また，作ったリズムフレーズを打楽器の奏法も工夫しながら発表をした。例えば，春の様子を表現するためにタンブリンを打つのではなく，「しゃらしゃら」と鳴らしたり，トライアングルの打つ位置を変えていたりするなどである。他の子どもたちは，発表するペアのリズムフレーズを見ながら，ペアの工夫を見つけたり，正しく演奏できているかを確認したり，自分たちの作ったリズムフレーズとの違いを感じたりすることができた。(図6)

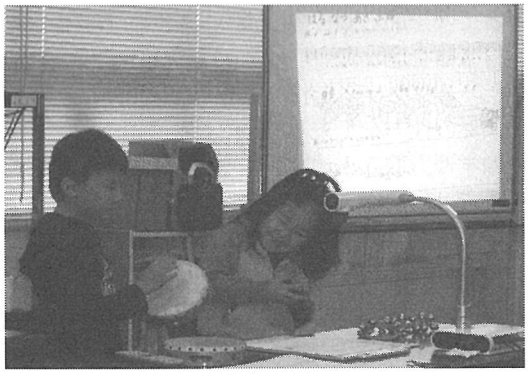

図6．　発表の様子

4．授業の考察

「リズムにのってあそぼう」では，ペアで交互に2小節のリズムフレーズをつなげていくことで一人ひとりの学びを保障することができたと考えている。しりとりは交代で行うという決まりが浸透しているのでペアの一人がどんどん相手の子をおいて作っていくということがおきないからである。次々にリズムフレーズをつなげていくことで自分たちの作ったリズムフレーズが長くなっていくので見た目にも楽しかったようである。できあがったリズムフレーズを最初から確かめるように何度も手拍子している姿も見られた。しかし，小節の中にどれだけ入るのかというおさえをもっとしっかりしておくべきであった。ワークシートからも2拍子なら2拍入るということがわかっていると感じられたが，リズムフレーズを考えることに「言葉を組み合わせる」というもう一つの活動を加えたことにより，子どもたちにとって複雑な課題であったのかもしれないと感じた。もう少し，全体の場で「かしわもち」だけでなく，4文字や3文字の言葉のリズムフレーズを一緒に作っておく必要があったと感じている。そこで，ある程度こちらで作っておいたリズムフレーズで，クイズを行った。私がどのようにリズムフレーズをうっているかを聴き，3つの中から選ぶという方法である。黒板に正しいリズムフレーズのモデルを提示していることにより，子どもたちは実際の音と音符を結びつけて聴くことができた。(図7)

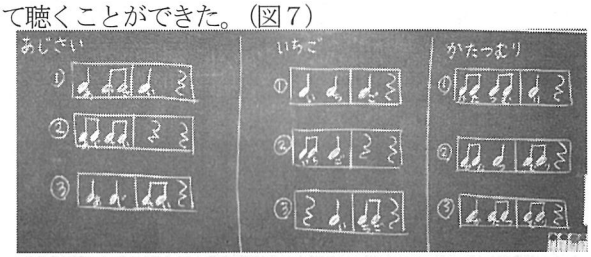

図7．　クイズで使用したリズムフレーズ

「ようすをおもいうかべよう」では，その季節らしさをより出すために，打楽器選びとリズムフレーズ作りと演奏の工夫の3つを組み合わせるという方法を行った。どのペアも「ふわふわしているところとすずの音が似ているから。」や「こりすが急いでいるところをカスタネットの音で表現したらうまくいく。」など，根拠をもって季節にあった打楽器選びをすることができていた。リズムフレーズ作りでは，歌いながら作っているペア，1小節ずつ確かめながら作っているペア，どの打楽器を使うか決めてからリズムフレーズ作りを進めるペアなど様々であった。どういったことを大切にしてペアでリズムフレーズ作りを行ったのかを書くスペースは設けていたのだが，実際の授業ではあまり活かすことができなかったと反省している。なぜなら，子どもたちがリズムフレーズを作ってすぐ正確に表現することは難しいからである。8小節のリズムフレーズを間違いなく作り上げることと，それを正確に表現することは別問題なのだと強く思った。発表するとき，下記にあるような子どもたちの思いを全体に広げる工夫が必要だったと感じている。

・ふわりというところと二分音符のトライアングルが合うと思う。

・ちょっと急いでるように早く演奏したいな。
・ちょろちょろしているのがわかるように「たた」をいっぱい使うよ。
・すずもトライアングルも両方いいと思うから半分ずつ使うよ。
・くじらがざぶんともぐるところは大だいこを強くたたいたらいいよ。
・ここは，○○君がやって，この部分は私が違う楽器でやるね。

どういう意図があったのかを他の子どもたちに十分知らせてから発表をすれば，そのペアの思いがもっと伝わったのかもしれない。ペアの工夫が聴いている子どもたちにはっきりと感じられるほどわかりやすいものはほとんどないので，こちらからの働きかけが重要になると感じた。

5．成果と課題

記譜には，2つの要素「音程がわかること」「リズムがわかること」がある。1年間の研究を通して「リズムがわかること」に焦点を当てて進めた。何となくリズムを覚えたり，丸暗記したりするのではなく，題材の中に記譜の活動を組み込むことにより，音符の長さを理解し，いろいろな音符の組み合わせでリズムができていることにも子どもたちは気付くことができた。

さらに，楽譜にかかわろうとする態度を身に付けることができたと考えている。それは，例えば，子どもたちが新しい曲を学習する前に楽譜を見ただけで「たんばっかりの曲や。簡単。」などと発言するようになったからである。四分音符ばかりであれば簡単だとわかるのは，この1年間，四分音符だけでなく二連八分音符や四分休符，二分音符を組み合わせてリズムフレーズ作りを行ってきた成果であろう。この4つの音符を組み合わせることで，子どもたちはいろいろなリズムフレーズを作ることができるようになったのである。

また，リズムフレーズを見て，「ここにうんがあるから，演奏するとき間違いやすくなってしまう。」「たああん・うん・うん・たああん・うん・うんって繰り返してるから，演奏しやすい。」なども子どもたちからでた気づきである。さらに，1年生の教科書にのっている曲はどれも簡単なリズムフレーズで構成されているものが多く，子どもたちは楽譜を見ただけでリズムフレーズをつかんで表現することができるようになった。つまり，1年生が表現できなければいけないリズムフレーズはどの子どもも正しく表現できるようになったということである。

これには，リズムフレーズ作りの時にペア学習を行ったことも大きいと感じている。ペア学習の様子を見ていると，中に自分の思いが通らず喧嘩をしてしまうペアもいたが，協力して作っている姿がほとんどだったからである。一人が間違えば，「ねえ，おかしくない？」ともう一人が言い，二人とも間違いに気付かない場合であっても，最後に手拍子で確かめるときに二人の手拍子の仕方に違いが生じてそこからもう一度確かめ直すという姿も見られた。さらにペアで強弱を考えたり，パートにわけて演奏したり，作ったリズムフレーズがもっとよくなるように工夫をしてお互いに高め合うことができていた。

しかし，逆に言えば，音符に対する理解が深まったばかりに，作ったリズムフレーズ通りに表現できないことも多くなっていった。4つの音符で作るリズムフレーズには複雑な物も多く含まれていたからである。いくら自分で考えたリズムフレーズであったとしても，正しく表現するためにはやはり練習時間が必要になる。音符を理解することに偏っていたつもりはないが，もう少し，作ったリズムフレーズと音をつなげる活動が必要だったのではないかと感じている。

もう一つ大きく課題に感じていることはペア学習の後である。ペア学習が終わった後，それぞれのリズムフレーズをどのように発表し，全体に広げていくかである。この進め方で授業の流れも大きく変わるし，子どもたちの学びも大きく変わると考えている。どのペアにも自信をもってみんなの前で発表させてあげたいと考えると，なかなか作ったリズムフレーズについて深めていくことは難しい。一つのリズムフレーズにこだわると他のペアのリズムフレーズは全体の場には出ない。題材や課題によって臨機応変にバランスよくできることが一番いいのであろうが，欲張ってしまってどちらも中途半端になってしまうことが多かったように思う。中学年以降になってグループ活動になると，自分たちでまとめていくこともできるので時間内に両方をすることが可能になることもある。しかし，ペア学習においても，限られた時間の中で全部のリズムフレーズを聴き，それぞれのリズムフレーズについて考えを深めていけたらと思わずにはいられないところがある。これは，おそらく長く続く今後の課題である。

こういった実践を低学年のうちから積み上げていくことで，一人ひとりが見通しをもって曲を聴いたり，表現したりできるようになるのではないかと考えている。何となく楽しいではなく，「○○だから楽しい。」と自信をもって言えるようになることが大切であり，そのことが大人になっても楽しく音楽を続けていくことができる基になると考える。

参考文献

和歌山大学教育学部紀要―教育科学―
第58集2008年2月
和歌山大学教育学部附属小学校紀要
第31集2007年3月
佐藤学，教師たちの挑戦―授業を創る，学びが変わる
村上芳雄，主体的学習実践のための学習方法訓練細案